

岩手県東日本大震災津波復興委員会
令和元年度総合企画専門委員会現地調査

(日 時) 令和元年 11 月 25 日 (月)

(調査先) 大船渡市、陸前高田市

大船渡市・北里大学三陸臨海教育研究センター

陸前高田市・東日本大震災津波伝承館

陸前高田市・陸前高田市保健福祉総合センター

委員

齋藤徳美 小野寺徳雄 菅野信弘 谷藤邦基 平山健一

北里大学三陸臨海教育研究センター

○菅野信弘委員 それでは、私からセンターの概要、成り立ちも含めてお話しさせていただきます。

三陸キャンパス全体の沿革史ということで、年表形式の資料をお配りしました。学部の開設は 1972 年で、それに先立って三陸研修所がここから少し離れたところにつくられたのですが、この研修所については、耐震性の関係で、今年度で撤去しました。その後、様々な建物が建ったのですが、2 枚目をめくっていただくと写真がついていますが、これがかつての三陸キャンパスの姿ということになります。今残っているのが、ちょうど真ん中に見えるのが今いる建物です。先ほどの 2 号館というのは、左斜め上程度にあります。それ以外に 3 つ大きな建物があったのですが、これが創立当時の建物ということですが、東日本大地震津波の影響で耐え切れなくなったということで、全て撤去済みとなっております。かなりキャンパスの面積的には広いのですが、がらんどうなキャンパスにはなっているという状況です。

一番上に体育館とグラウンドが見えます。体育館については、今もまだ形はあるのですが、震災直後は地元の方に使っていておりました。ただ、床にちょっと穴があいたり、なかなか使いづらくなってきたのもありますし、復興が進んで小学校、中学校の体育館も整備され、利用する人もだんだん減ってきたということで、今は利用を中止させていただいております。

1 枚目に戻っていただいて、震災後、相模原キャンパスへ一時移転ということで、1 年半ぐらいやっていたのですが、2013 年に移転を確定いたしました。2014 年に跡地を使ってセンターをつくりましょうということで、ここでは主に先ほど見ていただいた研究と同時に、学部の 2 年生をここに連れて来て、海洋実習ということで、臨海実習を実施しています。

実は、相模原に行くと、周りに一応ある程度行けば海があるのですが、石を動かしたり、海藻をとってどこかに持っていくということが出来ない状況で、学生実験が非常にやりにくく、ここがあって非常に助かっているという状況もあります。

さっき見ていただいたセンターの形になったのは、実は 2015 年ということですよ。センタ

一の改修と整備が終わって、リニューアルオープンとなりました。先ほどドンコのかまぼこの製造過程を見ていただきましたが、NPO法人のかたつむりと共同研究という形でつくっていただきます。隣にパッケージの写真を示しておきました。明日、イワテ・フード&クラフト・アワード2019で、表彰式があるのですが、特別賞をいただいたということで、私も表彰式に出席いたします。

ただ、これはドンコを材料にしていますので、資源量がどのぐらいあるかわからないのです。ですので、余り売れ過ぎても困ると思っています。だから、地元で三陸の道の駅に来た人でなければ食べられませんなどというぐらいの位置づけで展開していかないとまずいかなと思っています。

1972年創設ですので、2022年で学部が創立50周年ということになります。

御質問は、後でまとめてお受けします。

○清水恵子氏

私からは、三陸キャンパスにおける活動について紹介させていただきます。菅野先生のほうから今あったのですが、キャンパスの現状として、現在、三陸臨海教育研究センターに実際いるのは、教授クラスが2名、実験補助員が3名、それから事務職員が4名、地域連携担当ということで、私が配属されています。

こちらの建物は上が研修フロアで、宿泊施設もあります。それから、2階、ここのフロアなのですが、事務室、先ほどの共同ラボ、それから講義室ということで、講義室も貸し出してあります。1階は先ほど見ていただいた水産加工室と、それから水槽室になります。先ほど移動した2号館には、それぞれの部門がありまして、一応研究室のような体をなしています。

ここの利用者数ですが、2018年度延べ人数で1,523名、毎月先生方と学生が来て調査を行っているのと、三陸臨海実習で150名ぐらい来て利用しています。

こちらは、大船渡市を中心にした地域連携事業を表にまとめたものです。シンポジウム含め、1年生から3年生の必修単位になる臨海実習もここで行われています。2018年度は124名の学生が参加しました。他にも大船渡市の会議等の委員なども務めておりますし、大船渡市内で共同研究も幾つか進めています。

こういった形で進めているのですが、ではここのセンターの地域連携部門で何をしているかですが、まず1つ目としましては、先生方の研究の成果の普及活動ということで、ここがスタートした初年度には、大船渡市の水産課さんの全面的な協力のもとに、漁協などを個別訪問しまして、ここの宣伝をいたしました。それから、震災後に行われた事業の研究成果の普及をいたしまして、話している間にこんなことに困っているというのを聞き出して、今度それを研究テーマとして使えないかというようなことをしています。

また、窓口業務もやっています。直接こちらにこうしたい、ああしたいなどというような問い合わせもありますので、そちらの受付をして、相模原にあるセンターの運営委員会に上げるということをしています。

それから、地域における共同研究ということで、直接私に関わっているものでも今4つ進んでおりまして、先ほどのドンコのかまぼこ、これは試験販売に至っているのですが、渡部先生の研究グループがドンコでかまぼこをつくれることを発見しまして、それに基づいて今NPO法人のかたつむりさんがつくって、道の駅さんりくさんで販売するというル

ートを今つくっているところです。

あとは、水産庁の委託事業を受けまして、岩手県の重要な水産資源であります塩サケの研究にも携わっております。こちらは、サケ・マスふ化放流抜本対策事業というのがありまして、笠井先生を中心に、私も実験や研究に携わって今進めています。

それから、大船渡市の産学官連携事業、サケも放流するばかりではなくて、何か新しいことができないかということで、盛川漁協さんと一緒に長期飼育をして、今年の産業まつりで、ここで飼育したものを試食提供することもやってみました。

あと、先ほど見ていただいた褐藻マツモに関しては、宮城県の民間会社が何とかしたいということで今共同研究の準備を進めているところです。

先ほどのドンコかまぼこですが、こういった流れで今きているかということ、渡部先生の研究グループが夏場の利用頻度の低いエゾイソアイナメの高付加価値化を図りたいと、いろいろ分析をした結果、水産練り製品に使えるということで、ドンコを原料としたかまぼこの作製技術を開発したという経緯がございます。

この結果を受けて、実際に渡部先生と私とで沿岸の漁協の婦人部を回り、調理講習会を開きました。やはりこれも反応がよくて、今まで鍋や汁物でしか食べたことのないドンコが、実際こうやってねり製品になるのだというような感想も多くいただき、まずまずよかった活動ではなかったかなと思っています。

さらに、漁業以外の人たちにも知ってもらおうということで、大船渡市の産業まつりがかまぼこをつくり、無料で試食を行いました。こちらもおいしいという評価をいただきました。2018年にまた違うテーマで出したときに、去年の味が忘れられなくてまた来ましたという人もいた程で、よかったのかなと。今年度は、とうとう試験販売を進めています。

沿岸でこういったことをやってきたかといいますと、漁協女性部を回ったときに、大学と漁協という単独の関係ではなく、必ず間に行政に入ってもらい、情報を共有する形で、産学官で動けるようにいたしました。北は普代から、南は越喜来、この辺を中心に回り、釜石では岩手大学の釜石サテライトさんに間に入っていて、割と商品開発に積極的な白浜浦女性部というのがあるのですが、こちらにも普及して、使えるかもしれないといった評価をいただいております。

現在は試験販売ということで、地元の漁船漁業者の方から直接ドンコを買い上げ、それを今見ていただいたとおり製造しています。ここの加工室で営業許可をとってもらって販売は道の駅さんりくをお願いしているという状況です。

大学といたしましては、これまでの研究成果をもとに技術移転という形で、こういったつくり方がいいなどという研究を行っている段階です。

全体のコーディネートは大船渡市の企画調整課をお願いいたしまして、調整役に回っております。今は、本格販売に向けてこういった課題があるのかということを整理しているところです。

あともう一つは、やはりこれも無視できないテーマになっていまして、震災後復活したふ化場、大体20カ所ぐらいあるのですが、これは岩手県さけ・マス増殖協会に協力をいただきまして、個別訪問をして、こういった飼育をしているか、困り事はないかななどの話を聞き出しています。同時に、北里大学ではこういった研究に取り組んでいるという評価をした結果、今こういった形でやっています。例えば大学で小規模な試験をして、何か結果

が得られるとなったときに、次に岩手県水産技術センターで、大規模な実証型の飼育試験ができるような体制になっています。こういった条件で飼ったものが何年後かにどれぐらいの割合で帰ってくるかという試験もできる体制になっています。ここで得られた成果が今度は各ふ化場に還元できる仕組み、体制づくりを行いました。今実際水産庁の委託事業では、こういった流れで研究を行えるようになっています。

その他といたしましては、先ほどお話した三陸臨海実習ですが、こちらに毎年学生が120人、130人やってきますので、越喜来の漁業者の方の協力を得まして、全員ホタテの養殖の船に乗せまして、実際にホタテをつるしているところに行き取ってくる。取ってきて、その上についている付着生物を観察するという内容も入れていただきました。

あとは、大船渡市で企画している小中学校向けの体験講座というのがありまして、今年度は越喜来中学校から申し込みがありました。せっかくですので渡部先生のドンコのかまぼこを体験してもらおうということで、実際ここで中学生にも作ってもらって、作ったものを食べるということをやりました。これが渡部先生の講義を聞いている様子になります。

あとは、ここの施設見学をしたいという小学校からの要望もありましたので、タッチボールを用意したり、海藻押し葉を用意したりして、遊んで見学できることを企画したりして、これは随時受け付けている状況です。

大体このような形で進めておりますので、よろしく願いいたします。

○佐々木復興推進課総括課長 ありがとうございます。

それでは、御質問などございましたらお願いします。

○小野寺徳雄委員 小野寺といいます。

1つ質問ですが、今こういう形になって、大学の学生にとって越喜来というのは、学校が終わって卒業するときに、どれぐらい岩手に対しての気持ち、持っていてくださっているか、どう思われますか。

○菅野信弘委員 どうしても期間が短いということもあり、大きなインパクトは持っていないと考えてよろしいかと思えます。

○齋藤委員長 清水さんは、失礼ながら専任ですね、ここの大学の。どうなのですか。

○菅野信弘委員 専任というか助手です。

○齋藤委員長 大学が地域の中でともにという姿勢をとろうとしていると、大学がこれから力を入れていくというか、役割を担っていく気持ちがあるというのが専任の方の方がいいのかなと思っています。地元の人たちのところの接点というのは、1つずつ壁を超えていくような、そういう地道なプロセスを経ないか、なかなか進めない。

でも、せっかくここにあるので、岩手県民としてみると、特に水産関係のところ、大きな拠点としてつながりを広げてほしいというのが願いであります。

○菅野信弘委員 先ほどからドンコのかまぼこの話が出ていますが、あれもようやくかたつむりさんがつくってくださるということで、軌道に乗りつつありますが、それ以前は、まず学部でつくりたいと、学部が製造者になろうということで話を進めていたのですが、事故が起こったらどうするのだという話で、地元の婦人部の方など、いろいろ声がけしたのですが、では商売でやってみましょうと手を挙げてくださる方は、なかなか出てこない。よっぽど準備をして、初めて今回うまくいったということで、そのあたりの難しさは、かなり強く感じました。

あと、加工だけではなくて、漁業というか、獲っているばかりだと環境の影響なり、公海での中国、台湾の漁業の影響を受けたりと、自然の資源を獲っているだけでは、不安定だとは思っているの、安定的な仕事も加えないとは度々言っているのですが、なかなか動いてくれない感じもします。

結局もう少し多角経営をしないと、漁業のなりわいとしては安定しないことが非常に大きいかなと。多角経営まで持っていくためには、ある程度の資本がないといけないということで、漁協が中心になって動いている体制だと、結局単なる個人個人の漁業者の集まりで、なかなか団体として大きくかじを切るといのは難しいところがあるというのがあり、その辺の体制を変えていく必要があるかという気がします。

○平山健一委員 大学の存在は、この地域においてすごく心強いものがあると思いますが、今日お話を聞いて、非常に幅広い活動をしているのがわかりました。

だが、なかなかそれが伝わってこないというか、もっともっと発信していいと思います。例えば釜石のサテライトを岩手大学のほう使っておられますが、岩手県には岩手ネットワークシステムという産学官の連携組織があって、技術開発、販売、流通、商品化、企業、地代などいろんな人が集まっておちゃごちゃ相談していますので、もっと成果も幅広くやれば違った芽が育ってくるような感じがいたしました。

今度INSの岩手ネットワークシステムの総会が6月にありますので、お見えになって、やっていることをお話しただければ、本当に皆さん興味あることが多いのではないかと思いますので、ぜひよろしくをお願いします。

○佐々木復興推進課総括課長 それでは、清水様どうもありがとうございました。

東日本大震災津波伝承館

○齋藤徳美委員長 津波の伝承館というのは岩手県では初めてということで、ようやくできたということは、非常に意義のあることだと思っています。

ごらんになったように、非常に洗練されたものではありません。ただ、個人的にはやっぱり海というのは億千人の犠牲者を出した、何がまずかったか、このことをやっぱりきちっと検証していく必要があると考えております。皆さん方、ご覧になった印象、それからこれを高めていくためには、どんなことが必要かといった視点で御意見をいただければありがたいと思います。

○谷藤邦基委員 なかなか立派なものが建って多くの人に見ていただいて、自分なりにそれを消化するための一助にさせていただければいいのかなと思いつつ、一方で、以前この委員会にお呼びがかかったときに、地元の調査機関の人間だったのですが、今は小さな会社の役員をやっています、日々どうやってこの会社潰さないようにしようかと思って、そういう立場で改めてこの地域の産業を考えたとき、どうなのだろうなというのがずっと頭の中を離れない。だから、地震が起きました、津波が来ました、避難すれば人の命は助かります。その後をどうするかまでは、ここではわからないなと思って見ていました。これはこれで非常に重要なことなのですが、その後です。まさに今それで皆さん苦勞されているわけです。先ほど北里大学でも質問をさせていただきましたが、ただ実際に地震、津波がなかったとしても、もしかしたら漁業は変わらざるを得ない境遇に来ていたのかもしれない。あるいは、私の立場で言うと金融の世界では今非常にやばい状況になりつつあって、

いつ何が起こるか分からない、とんでもないことが起こりそうだという予感があります。

それやこれや考えていくと、この後、沿岸に限りませんが、産業の振興あるいは産業自体の復興ということを考えなければいけないかもしれないと思いつつ、今日いろいろな部分を拝見させていただいたような状況です。

○平山健一委員 復興の後の伝承の元締めがこの施設だろうと。そういう意味で、ゼロエリアにあった東北地方のいろんな慰霊施設の地図は、非常にいいと思いました。

しかし、地図1枚だけではなくて、やはり具体的な活動やイベント、いろんなもの、例えば釜石の施設ありますよね、鶴住居の。ああいうところとどんな連携を保っていくかと、そのあたりの指導的な役割をもっと果たしてほしいというのが1つと、それからこれは伝承という意味で、反省というか伝えるという意味の創造とともに、地域の活性化を引っ張っていく施設であってほしいという意味で、ジオパーク、観光、そういったものを全部含めた大局的なスタンスになってほしいと期待をいたします。

○齋藤徳美委員長 ありがとうございます。おっしゃるとおりで、陸前高田の地域ということを見ると、ここのなりわいは一体何だろうかと。大きな被災があったがゆえに、こういう施設もできて、これからの災害に対する対策あるいは地域の復興、復興学、そういうふうなものをここでさらに進めていくという形の拠点というふうに活用していけば、ある面では陸高のなりわいの一つの材料になるかもしれないという、そういう期待も持てると私も思います。

そういう点で言うと、非常にいい展示ができた。ただ、今おっしゃられた二度と災禍を繰り返さない、具体的に何をしていくのだということは、これからすぐ答えが出るわけではなく、いろいろ協議しながら進化させていかなければならないし、同時に、その復興の先にある地域をどうするかということも肝にしていかなければならない。この場所が、この展示で、フロー図ではなくて、いろいろ協議して議論して進化させていく拠点という形の役割を担えば、ここを訪ねてくる人も1回ではなくリピーターも出るだろうし、あるいはこれから日本で大きな災害が起きかねない地域からの一つの案として、ここが拠点という形で活性化の源にもなり得るという期待を私は持っております。ですので、館長にもぜひそういう方法での尽力をお願いしたいし、それから運営委員会自体が今のように、単に展示の中身ではなく、どうしたらこういう災害を繰り返さなくて済むのか、大きな難題で、協議すべき、考えるべきことがたくさんあると思います。そして、その後の復興、復興学という点についても論を進めていける、そういう議論をして、さらに活用していくためにはどうするかということはこの運営委員会で詰めていく、生きていくという、そういう場にぜひ活用してほしいというのが私の願いであります。

菅野先生、いかがでしょうか。

○菅野信弘委員 大変すばらしい展示で、ぜひ来年の8月には学生を連れてこようかと思ったのですが、1点少しお話を聞いてきたのですが、その辺の利用の手引き的なやつはホームページを見ればわかるのですか。その辺の発信が足りていないのかなと。

○熊谷正則氏 団体予約ですか。

○菅野信弘委員 はい。

○熊谷正則氏 ホームページからできるようになっていますので、御一報いただければ段取りします。

○菅野信弘委員 あと、この展示関係には、学芸員の方は入っていらっしゃいますか。

○熊谷正則氏 はい。職員に学芸員が、県立博物館にいた人間が1人おります。

○菅野信弘委員 展示としては、今日初めて見させていただいて、もう一回ゆっくり来て見てみたいと思うのですが、その後、3回目となるとどうなのだろうというのが私的には疑問で、常にこの展示だけだと、人を呼ぶのが今後難しくなるなど。ぜひたくさんの人に見ていただきたいので、何か人を呼ぶ工夫をぜひ今後は考えていただければと思います。

○齋藤徳美委員長 これだけの拠点ですので、積極的に、例えば三鉄は防災列車を走らせる、あるいは学校の防災演習として総合学習でやってくるなど、いろんな呼び込みの手はあると思います。ですので、それを企画してホームページでただ待っているのではなくて、売り込みに行くと。修学旅行をするのだったら、防災研修ということで来ましよう。そのためには、当然来た人たちにどんなふうなことを語れるかという、そういう専門員の育成も要りますが、そういう積極的なものとしてここを活用していく、前向きな姿勢が必要だと思います。どうぞホームページ見てください、来れば対応しますと。昔の役所みたいな対応はぜひ考え直していただきたいと思います。

それから、さっき言ったように、3回目というお話がありました。これは、深化させないと、それで終わりなのです。ですから、この拠点の場所で、いろんなテーマあると思います。例えば何でこんなに犠牲を出したのと、いろんな人から意見を聞いてもらう、あるいはそういうテーマでシンポジウムといたら固いが、いろいろ討論するような場、ここを拠点として語らいたり、そういう形で生かしてほしいという思いがあります。

ですので、これは可能性を秘めた場所なのです。ここから日本の自然災害に対する取組、協議して深化させていこう。復興の取組と、また復興学というのはものになっていません。ですから、そういうテーマでいろんな人を呼んでくるシンポジウムを開く、あるいは車座で地域の人と議論するなど、そういう企画で能動的にこの場所を生かしてほしいと。それがあれば、菅野先生、3回目に参加する人も出てくると私は思っております。

小野寺さん。

○小野寺徳雄委員 正直私、今日3回目です。おっしゃるとおりなのですが、私3回というのは、そういう機会に恵まれたのもありますし、あとはよく読んでいくとすごく情報量があって、3回でもまだ足りないの、私はまた来ようとは思っているのですが、そういう意味で無料で入れる状態でよかったと思っています。

あとは、今日1点申し上げたいのは、平山先生おっしゃいましたが、ここは県内のいろんな追悼施設のゲートウェイとしての機能を持っているということで、ゲートウェイの施設というのは、あそこで今日初めてちゃんと見ました。初めてよその県からいらした方が本当にここに入って、ゲートウェイとして、釜石や田野畑にもこんなものがあるのだなど見てくれるかという、非常に心もとない感じがしました。県のゲートウェイ施設を陸前高田市に置くということについて、私が県職員のとときに、ほかの首長に了解とってもらった関係もあって、気になっていまして、ゲートウェイ機能を持たせた施設だということをもう一度考えていただいて、何かできることがあればした方がいいのかなという感想でございました。

○齋藤徳美委員長 要するにこの施設、展示のリニューアルなど、いろんな意見の中で、例えば今おっしゃったような観点で、もう少しわかりやすいものにするなど、いろんな改

変、進化は必要なのだらうと思います。

ただ、こういうものをつくると、運用あるいはリニューアルの視点といったものはなかなか出てこないのが現実だと思いますが、県として見るとこれだけの意義があるとすると、そういう方向での活用というのは、ぜひ積極的に考えていくというお考えになっていると解釈してよろしいのでしょうか。

○大槻復興局長 展示施設を完全にリニューアルというのは、なかなかここ数年では難しいと思いますが、各地域の防災の取組など、あるいはそのときの津波からの避難のときの話などをある程度ここ2年ぐらいかけて企画展示という格好で進めていきたいと思っていましたし、ゲートウェイ機能ということで、あそこの入り口とエントランスのところですが、必ず1人常駐しております。そこで、ある程度県内の津波の各施設だけではなくて、観光施設も含めて解説をするという話になっていると思います。

あとは、来年に関して言えば、三鉄の関係も先ほどお話が出ましたが、JRのデスティネーションキャンペーンがあるみたいで、それは東北なのだそうです。そのときに、この施設は非常に発信力のある施設なので、そういったものを十分商工と相談しながら売り込んでいきたいと思っていますし、来年度末には宮城に同様の施設、再来年度になると福島にもできるということで、それぞれの津波伝承館のネットワーク、県内で言えばトモスとのネットワーク、こういったものは十分とっていききたいと思っていますし、とりあえずは各地域、地域での取組みたいなものも、この場で企画展という格好で紹介していくというのは、すぐにでも始められる話なので、やっていききたいと思っていました。

○小野寺徳雄委員 企画展は大賛成です。ゲートウェイとして。

あと、ちょっと気になっているのは、ゾーンゼロという入ってすぐのところ案内してくださる方は、1人で入ってお願いしますと言ってもいいのでしょうか。

○熊谷正則氏 手があいていれば少し、全部ではないですが、最初御案内していました。

○谷藤邦基委員 実際あのときこういうことがありました、ではこうしたらいいですよねという話というのは、切り口を幾ら変えていってもやっぱり限界があると思うのです。新しい事実が出てくることもそうないでしょうし、変わっていく部分があるとすれば、まさに復興そのものなのでありまして、ただそこを何かの形で変わりつつあるまちの姿など、復興が進むまちの姿など、そういったものも取り上げられる部分があると、常に変化があるのではないかなという気がしながら伺っていました。

○齋藤徳美委員長 時間でしょう。正直言って、ここは1日かけてじっくり見ないと、これはなかなか見えてきません。駆け足で見ているから3回来ているのであって。また勝手なこと申し上げましたが、ありがとうございました。

陸前高田市保健福祉総合センター

○佐々木復興推進課総括課長 それでは、参加しております委員、それから職員について御紹介させていただきたいと思います。

総合企画専門委員会、今御挨拶いただいた齋藤委員長です。

○齋藤徳美委員長 齋藤です。

○佐々木復興推進課総括課長 小野寺委員でございます。

○小野寺徳雄委員 今日はよろしく申し上げます。

- 佐々木復興推進課総括課長 菅野委員です。
- 菅野信弘委員 菅野と申します。よろしく申し上げます。
- 佐々木復興推進課総括課長 谷藤委員でございます。
- 谷藤邦基委員 谷藤です。よろしく申し上げます。
- 佐々木復興推進課総括課長 平山委員でございます。
- 平山健一委員 平山です。よろしく申し上げます。
- 佐々木復興推進課総括課長 続きまして、岩手県復興局の大槻復興局長でございます。
- 大槻復興局長 大槻です。よろしく申し上げます。
- 佐々木復興推進課総括課長 遠藤副局長でございます。
- 遠藤復興局副局長 遠藤です。よろしくお願いたします。
- 佐々木復興推進課総括課長 山田まちづくり・産業再生課総括課長でございます。
- 山田まちづくり・産業再生課総括課長 山田です。よろしく申し上げます。
- 佐々木復興推進課総括課長 佐藤生活再建課総括課長でございます。
- 佐藤生活再建課総括課長 よろしくお願いたします。
- 佐々木復興推進課総括課長 進行を務めさせていただいております復興推進課総括課長の佐々木です。どうぞよろしくお願いたします。

それでは、本日は福祉部長の齋藤様、それから千葉次長、馬場課長補佐、武田地域包括支援センター係長、よろしくお願いたします。

- 齋藤福祉部長 御苦労さまです。齋藤と申します。よろしくお願いたします。
- 千葉福祉部次長兼保健福祉課長 福祉部次長の千葉と申します。よろしく申し上げます。
- 千葉福祉部子ども未来課長 福祉部子ども未来課の課長をしております千葉でございます。よろしくお願いたします。
- 馬場福祉部保健福祉課長補佐 福祉部保健福祉課の課長補佐をしております馬場と申します。よろしくお願いたします。
- 武田地域包括支援センター係長 地域包括支援センター係長の武田です。よろしくお願いたします。

○佐々木復興推進課総括課長 それでは、ご説明をお願いいたします。

○千葉福祉部次長兼保健福祉課長 私から資料に沿って説明をさせていただきたいと思っております。保健福祉センターの概要、それから復興の取組状況、包括支援センターについて、先にセンターの概要から説明させていただきます。今入り口から見ていただきましたが、この保健福祉センターは災害復旧がメインでありまして、機能といたしましては、市民の健康づくりを推進する保健センターの機能、それから高齢者の保健福祉の増進を包括的に支援する地域包括支援センター機能、それから発達支援を必要とする児童の機能回復等、それから児童の家庭に対する療育に係る各種相談、助言を行うものとしてふれあい教室をやっております。

建物については1,357.6平方メートル、鉄骨づくり平屋建てでございます。

工事費は大体5億7,000万円ほどで建設いたしました。これは災害復旧費、それから県からの保健センターの建築費、それから起債等で建築しております。

所要室につきましては、今見ていただきましたが、ここが検診室で、各種検診はこちらのほうで行っています。それから、相談室、授乳室、交流室、指導訓練室等々でできてお

ります。高さはありますが、延べ床としてはそんなに大きくない建物かと思っております。総合センターというには、少し小さいかもしれませんが、ただこの場所が高田病院と離れていることで、災害復旧の際に連携をとれるかなど。それから、向かいには今年から高田小学校もできましたので、この位置としては非常によかったかと思っております。

それから、東日本大震災からの復興の取組状況でございます。かいつまんで説明をいたしたいと思っております。本市の仮設住宅の入居ですが、大分復興は進んでおりますが、本市ではみなし仮設を含めましてまだ160世帯ほど、約380名ほどが仮設住宅で暮らしているところでございます。集約化も図っておりますが、もう少しかかるかと思っております。

次に住まいの再建状況でございますが、本年9月末現在で約3,000世帯ほどが再建しておりまして、再建率は82.1%となっております。大分再建も進んでおりますが、18%の方がまだ住宅再建もこれからということでございます。

本市の場合、復興は大分進んではおりますが、かさ上げ事業、土地区画整理事業がまだこれからの部分がありまして、一番下の平地部のところが、造成工事完成が来年度末というところ、宅地引き渡しも順次引き渡しはしておりますが、まだこれから最後は来年度末というところでございます。

それから、災害公営住宅の建設状況でございますが、こちらにつきましては全て完成しておりまして、それぞれ施設のほうに入居しております。建設総数895、今現在で742戸が入居しているというところでございます。

それから公共施設の整備状況、再建状況でございますが、これは順次建設しておりますが、公共施設、庁舎等は一番最後ということで、当初からの計画でございまして、8番の庁舎は令和2年度末ぎりぎりではないかなと思っております。

それから、今市内のかさ上げのところ、アバッセの隣に建てます（仮称）市民文化会館、建設中ございまして、来年の4月にオープン予定というところになってございます。それから、博物館が来年度、それから気仙地区コミュニティセンターというのが今年度中の完成予定というところございまして、それらの整備が整えば公共施設もほぼ完成かなと思っております。

それから、広田の県立野外活動センター、これが県の工事でございますが、工事が始まっておりまして、来年度末が完成予定というところになっております。

事前に委員から病院との連携等についてというお話がありましたので、これも説明をさせていただきます。隣に県立高田病院がございまして、これまでの連携といたしますと、市では中核病院ということでもありますので、その位置づけとして市で抱えている国保の診療所が2つありまして、その診療所と、それから市内の医療機関等と連携を図っております。それから、本市で行っております他職種連携というところで、通称チームけせんの輪というわけなのですが、保健、医療、介護、福祉の連携を図っておるところになっております。この中には、もちろん高田病院も入っていただいて、様々な活動を行っているところでございます。研修会も2カ月に1回ほど、保健も介護も福祉も全部入って研修会をやっております。この中で、高田病院には医療や福祉のアドバイスをいただいているところでございます。

それから、大船渡病院が急性期病院、高田病院は回復期という位置づけになってございますので、こちらが包括支援センターということで、その後の介護施設等を利用になる場

合は、病院との連携を図りながら、相談、その後の連携調整をとっているというところがございます。

今後についてなのですが、さらに万が一の大規模災害が発生した場合等は、医療拠点が高田病院になりますので、こちらは後方支援的な場所になるのかなど。具体的には、DMAT、災害派遣医療チームが来た際には、恐らくここに集まっていただいて、ここから行っていただくと。それから、別途保健師等もいますので、そういう拠点になるのかなど考えております。

それから最後に、本市の保健、医療、福祉の現状と課題、今後の展望というところもお話をということでございますので、これは本市に限らずですが、高齢化率が本市では約40%となっておりまして、医療支援についても、岩手県が最下位ですが、本市も気仙地域の下位に位置しております。とはいえ、これはすぐに状況が変わるものではないと思いますので、今ある医療支援、それから介護支援等を有効に活用、それからこれ以上落とさないようにと考えております。

それから、国の復興期間があと1年4カ月ということになっておりますが、本市は本当に被災の状況が他市と比べるとと言うと語弊がありますが、非常に大きかった分、令和2年までの事業も様々ありますので、そういう意味では国の復興期間終了後も支援の継続を要望等で求めているところでございます。その中で、医療、福祉、保健の関係で申し上げますと、やはり心の復興に関する支援の継続を継続してほしいと考えてございます。

それから、先ほど言いました医師、看護師、専門職の不足がどうしてもありますので、その点はすぐに解決できる問題ではないと思うのですが、やはり被災地としてもその辺については何らかの、派遣でも何でもあれなのですが、何とかならないのかなど考えております。

それから、現在県の復興特別措置の期間延長ということで、訪問リハビリテーション等やっただいておるのですが、これは県には要望済みなのですが、これも今年度末で終了ということでしたので、3年間の延長を何とか県のほうにはお願いしておりますので、その間に市の事業所さんも看護師を見つけたいということで、先ほど言ったように医療資源がなかなか足らなくて、看護師が見つからない状況もありますので、その延長をお願いしたいと考えてございます。

大変手短な説明でしたが、以上となります。よろしくお願いたします。

○佐々木復興推進課総括課長 ありがとうございます。

それでは、委員の皆様の方から御質問、御意見等がございましたらいただきたいと思いますが。

○谷藤邦基委員 今保健医療の現場等のお話いただいたのですが、産科の医者は。

○千葉福祉部次長兼保健福祉課長 産科はないです。ここは大船渡病院がメインになります。あとは、人によっては気仙沼に行かれます、位置的に。大船渡が大体多いと思います。

○谷藤邦基委員 大船渡病院以外には、産科の先生はいらっしゃらないのですか。

○千葉福祉部次長兼保健福祉課長 いらないです。

○谷藤邦基委員 大船渡病院だけ。

○千葉福祉部次長兼保健福祉課長 はい。

○谷藤邦基委員 先立って県の総合計画審議会でも、花巻の市長が産科医の不足が深刻だ

という話をしていたのです。ただ、そこが弱ると長期的な人口の動態ということにも影響が出てきますので、どうなっているのかと思って。

○千葉福祉部次長兼保健福祉課長 大船渡のほうが多いのですが、気仙沼に行かれる方も見えるという。大船渡のほうが多いです。年間大体 100 名の出生数があります。

○齋藤福祉部長 市に診療所が 2 つございまして、そこが結構活躍をさせていただいているのですが、その医師に、結構高齢になっていらっしゃるって、もうちょっと派遣をしていただけたら本当にありがたいなとその土地の方も思っているって、なかなか後任の方も見つからず、今苦労しているという状況なのです。

○齋藤徳美委員長 どうぞ、御自由に御質問、御意見あれば。

○菅野信弘委員 確認をちょっとさせていただきたいのですが、そちらに高田病院もありますからですが、あるいはこの場所も DMA T の拠点にもなるというところで、ここに至る道路、経路というのは複数ではあるのですが、何ルートあるという感じなのでしょうか。

○千葉福祉部次長兼保健福祉課長 大きく 3 ルートです。

○菅野信弘委員 3 ルートはあると。一応大丈夫そうな感じではあるのですね。

○千葉福祉部次長兼保健福祉課長 そうですね。浸水域を通らないで。

○菅野信弘委員 通らないで 3 ルートあると。どこかで崖崩れというか、土砂崩れみたいなのがあっても、どこか通れるところ 3 ルートあると。

○千葉福祉部次長兼保健福祉課長 はい。

○平山健一委員 震災後 8 年たちました。高田と大槌、特に関心を持って見守ってきたつもりなのですが、今日病院の施設の屋上から眺めて、土盛りは随分終わって、ハードの整備は順調に進んでいるなという感じはするのですが、これから慰霊施設の運用など、それからこの施設のように心の問題、老人の問題、子供の問題、そういう難しい問題が残っていると思います。そういうものを今日訪問させていただいて、非常に明るい雰囲気、笑顔で迎えていただいたので、前向きに進んでいるのかなと期待はしているのですが、まだまだこれから始まったような段階もありますし、頑張ってもらいたいと思います。

お聞きしたいのは、どちらかというと全般的なことで、委員長も言っていたのですが、ああいう慰霊施設ができて、そこが拠点となって、高田はどんな産業でなりわいをつくっていくのかということが見えない。どういう産業が合うのか、何で人を集めて商店街を経営してまちとして活気を持つ、そういう姿がどうも見えないという委員の意見が出ていまして、そのあたりもし何か県や我々、それから高田だけではなくて大船渡や釜石など、連携を広めてくれと、そういう要望が、どんな課題を持っておられるか、その課題を教えてください。我々もそれに沿って努力をしたいなと思っているのですが、いかがでしょうか。

○千葉福祉部次長兼保健福祉課長 では、私から。

市長は、先ほど産業という話をされていましたが、産業については 1 次産業をベースに考えているということはおっしゃいます。ただ、1 次産業といっても、あとは交流人口、そういうものをベースにということで考えておられて、今回国の追悼施設ができましたので、そこに来た方が、月 10 万人程度来ていただいていますので、年間 50 万人の予測ですが、100 万人ぐらい来る可能性があるということで、その方々をアバッセというか、かさ上げ

のほうに誘導する施策を市でやっていたし、それからそういう方たちのルート設定をしております。それから、どうしても通過型の方が多いですので、それを滞在型にするための施策を市としては検討していると。その中で、あとは民泊も含めて様々やっているということでございます。

○馬場福祉部保健福祉課長補佐 基本先ほど申し上げたとおり1次産業なのですが、できる限り1次産業から2次、3次と行くのではなくて、1次産業の方たちにできる限り製品化していただいて、交流人口をもとにして新たに商品を知っていただくということを基本に置いているということでございます。

あと、最近新聞報道もなされましたが、ワタミの協力を得ながらオーガニックランドなど、あとは交流人口の拡大、先ほど民泊も出ましたが、低地部に運動公園がもうすぐ整備されますので、前は結構そちらに各合宿、野球やサッカーも含めて来ていただいていたという流れがありますから、そこと、あと県の施設になります、野外活動センターも今度広田に建設されるということですので、それらも含めて人を呼んで、新たに高田の産物を知っていただいて、またそれを販路につなげていくということを総合的には考えております。

あと、今泉地区では、これも最近若干新聞報道、地元の新聞だけかもしれませんが、なったのですが、発酵の里ということで町なか再生計画を再度見直しを行って、そこでカモシーという施設をつくって、そこでも取組を進めていくということにはしているところです。

ただ、どうしても視察に見えられた皆さんが気にされるのは、中心市街地で空き地が多くなっているということが挙げられます。これについては、マッチング事業を現在も進めておりますが、実際は高台移転のために100坪分移したものの、それ以外の土地が中心市街地に残ったのです。整理に当たって農地ですか、宅地ですかとおっしゃると、大抵聞かれた方は宅でお願いしますということになったのですが、宅地で整備したものの、ではその後の展望というのはいかがなものでしょうかということをお聞きすると、実際すぐすぐ展望がないなどという方が実質的には多かったと。初めに、例えば賃貸したいのだという御希望を早目に言っていた方は、ある程度固めてしまって、大きな区画になるようにということでは調整していたのですが、その後から未定という方がその時点から多かったものですから、実際現時点で聞くと、まだ未定だ、決まっていない、何とかマッチング事業をお願いしたいという、後出しに近いような形での御希望が出てきたので、現在マッチングの作業を進めているということでございます。

○齋藤徳美委員長 復興計画の基本でつくったのは、まず安全。また津波が来ます、確実に。それから、この地に住むということは、ここでなりわい、これが成り立つからそこに人が住むわけで、それが成り立たなかったら人が住む理由がなくなる。隣に行くと、気仙沼市はあれだけ漁業で食っていきます。みんなたかが魚のしっぽまで、フカヒレというところすっかり有名になってしまって、というようななりわいの大きな柱がある。陸高は、漁業が中心というわけではなく、とって農業で食っていくというわけでもなく、従前から何かなりわいだったのかということを含めてみると、非常に難しいという。確かに松原なんかいいところだ。交通の交差点でもあるし、そういうメリットはあったが、ここまで街がやられて、では次何をなりわいとしてここに住む人に住んでもらうのかと。アバッセがで

きたって、周りに人が住まなかったら商業施設も、誰も成り立たない。その辺は、私は個人的にはずっと心配していて、これだけ被災して、そしてここに国の追悼施設もできるとすると、私は堤防に何百億円をかけるのだったら、ここに国際復興大学なるものをつくって、世界中いろんな災害が起きる、そしてどうそれを復興していくかという学問体系がない。そういうものがもしかしてここにできれば、陸高の一番のなりわいのもとになるのかなということ当初考えておりました。もちろんなかなか通るものではありませんが、今日の施設見てみて、いろいろ課題はあると思うのですが、陸高に国が、そして県が運営する津波祈念館なるものができたとすれば、それは一つのほかにない大きな財産、なりわいのもととして活用していくということを大いに考えなければいけない。

ですから、今日館長にも申し上げてきたのですが、ここにいろんな人たちが来るように、子供たちの総合学習、遠足で、修学旅行でも、これからの災害を考えるために陸高に行って学びましょうと。そういう中で、いろいろつくっている施設なんかが連携していけるような、そういう総合的な柱をつくるべきではないかと私は感じていました。

様々なものが、ほか全部潰されている中で、負の遺産かもしれないが、生かせるものとして残っていると。これは、むしろ非常に貴重な財産ではないかと思えます。ただ、展示のところで人を呼ぶのは限度がありますから、常に進化させて、言ってきたのは、また災禍を繰り返さないためにどういう対策をしたらいいか、これはどんどん考えてやっていかなければならない。

それで、私の伺いたかったのは、災害復興住宅ができました。多くの方が入っています。その方々、私も伺うと、独自で住宅を再建できない、特に老夫婦、あるいはひとり暮らしの方々、展望が持てません。なりわいにかかわっていれば自己再建ができるかもしれないが、もうそれもだめだと。社会とのつながりも切れてしまっていて、孤立していると。そういう方々の苦労というのは、例えばこの総合福祉センター、どんな形で具体的にやっていることがあるかというのがもしあれば教えてほしいです。

○千葉福祉部次長兼保健福祉課長 委員長からもお話あったように、災害公営住宅はふんだんにできているわけなのです。陸前高田市の場合、まず岩手大学さんの協力を得まして、そちらの船戸先生という方に入ってくださいまして、まずコミュニティーをどのようにして仕掛けていこうかということから始めさせていただきました。仮設住宅では、被災してすぐということは、皆さん同じ境遇だから、みんな一緒に頑張ろうという動きでした。それが、こちらの災害公営住宅ができた、あちらができた、力ある方が徐々に出て行くわけです。残された方々というのは、正直申し上げて、今委員長がおっしゃったように、どうしてやっていっていいかわからないなという人たちが残されていったわけです。

まず、残された人たちの仕掛けとしましては、見守り支援という形で、社協の職員や、あるいはこちらで業者と委託契約を結ばせていただいて、見守りという形もとらせていただいております。もちろん災害公営住宅では、船戸先生に入ってくださいました中で、自主的に行政がつくりなさいというものだと、どうしても失敗してしまう例が多いところから、住民の自治、自主性の部分をできるだけ信じて、何回も何回も会議にかけていただいて、例えば市役所の向かい側にある県営の栃ヶ沢住宅なんかは、本当に毎月お話し合いを持って、面倒くさいなと言われながらも、行政ももちろん参加させていただきつつ、地元の方にも参加していただきつつ、今となっては自治会はある程度自分たちの力で進んで

おるという状況下にあります。

ただ、やはりその中でも、やはり生活に対する不安というものが1つ、また1つと出てきているという状況です。そういった中で、行政ができることは、やっぱり活躍の場を少しずつ出して、あるいは発表して引っ張り出す、言葉は悪いですが、活躍できる場をいかに準備するかというのが重要かと思っております。遊びだけではなくて、人生経験豊かな方に活躍してもらおう場、そういったものを準備してまいりたいなと思っていて、我々としても生涯現役活用というふうな事業のほうにも立候補させていただいて、今まさに進めようという状況にあります。

○齋藤徳美委員長 結構なかなかうまくいかない、幾ら行政が仕掛けても、年になるとなかなか頑固で、もう俺はいいみたいところで、皆さんが努力するにもかかわらず、結局孤立していくというのがあちこちあるので、なかなか大変な作業だと。簡単にこうすればできるというものではないが、これは努力していかないと、これから自死の方々がふえてきかねないという、非常に心配です。

○菅野信弘委員 私北里大学の海洋生命科学というところにおりまして、今3年生の陸前高田出身の女の子が1人来ているものですから、高田についても、昔大船渡にいたということもありますが、かなり気にとめているところです。

ただ、なかなか今日見せてもらって、大変だなと思うのですが、まだ街の格好になっていないので、いつ頃になりますか。

○千葉福祉部次長兼保健福祉課長 実際かさ上げ等については、それこそ復興期間、来年度期間中には終わるだろうということではあります。

住宅やなりわいの再建の部分については、換地が終わって宅地ができましたとなっても、正直なかなか出てきていただけなかったりというのが今まであったのですが、さすがに復興期間の終わりに今なっていますので、各種お店だったりという形では出てきていただいているという現状です。

ただ、一番難しいなと思われるのが、私は子供関係の課なので、子育て世帯はある意味とっくに中心部ではなくて、どちらかというが高台など、周辺部に家を建ててしまっていると。中心部に集まってこよう、戻ってこようとしている人たちは御高齢の方たちが多くて、そういった意味では、例えば子供たちの声というのを聞かせられるというのは、中心部にあるまちなか広場という広場であったり、そういった部分でしかなかないというのが現状ではあります。

先ほど委員長からも防災の絡みがありましたが、「ノーマライゼーションという言葉の知らないまちづくり」ということで、福祉関係も含めて何らかのリアクションを起こしたいということと、あと先ほどお話に出た、特に防災教育など、その部分については強く考えているところであります。岩手大学もそうですし、立教大学も含めてのグローバルキャンパスの中においては、主に防災教育などの学習を大学生に進めていただくと。

先ほども民泊の話が出ましたが、年間3,000人以上、だんだん伸びてきていて、来る中学校、高校の学生たちのほとんどは、防災教育、防災学習のために来ていただいている流れになっています。そこで泊めた世帯だけではなくて、できた道の駅の施設だったり、そういったところを転々と周りながら学習して、自分のところの地域に戻った場合にどう生かせるのかということをお話していただく形になっています。

まだ小さな動きですが、できれば委員長がおっしゃるように大学など、そういう学習の場という方向まで持っていきたいなということから、今年はSDGsの未来都市にも選定されましたので、それも含めて新しい復興の計画や、まち・ひと・しごとの計画にも取り組んでいく予定にしております。

○齋藤徳美委員長 豪雨災害でも、これぐらいやられて本当に私もどう対応するか、苦慮はしていますが、逆に言ったら各地域でいつ、どういう災害が来るかわからないという思いが募っています。チャンスかもしれません。ぜひ陸高に防災教育、ある被災の現状をということで積極的に、担当者に知恵を絞って売り込めぐらいの、これだけの負の財産があるとすれば、転んでただ起きたのでは済まないというものもあってしかるべきかなと考えたりしています。すると、道も開けるのではないかという気がします。

せっかくなので、1つ聞かせてほしい。大槌もかさ上げをやりました。私も農学部で建設、土木に近いところにいたのだが、力づくであると。今の日本の土木の技術とはすごいと思いつつも、こんなにまでしてまち全体をかさ上げと、どこからそういう発想が来たのだろう。

率直に言いまして、今つくっている堤防は、今回の津波の高さはもちろん、1,000年に1遍の津波には堤防は耐えられないといって、全国基準で岩手県の堤防も今回の津波よりも低い堤防でしか整備していません。ただ、私が心配するのは、岩手県で言えば明治の津波は今回クラスだったし、1,000年に1遍ではなくて、数十年に1遍、今回これでも近くのものがある。そうすると、堤防で防御はできない。まして12メートルのかさ上げでも、それは浸水します。何か思いがあったら教えてほしい。

○千葉福祉部次長兼保健福祉課長 非常に難しい。L1津波に耐えられるということと12.5、これは当時県といろいろ協議をしております。

それから、かさ上げについてなのですが、前例をかさ上げしているわけではなくて、あくまでまち自体、アバッセで言えば駅なのですが、駅からこちらの分だけを10メートルほどかさ上げして、あとは今泉の土を、今泉の方々も高台へ行くために、その高台をつくるための土地を削ると。その土をこちらにちょうど移動させるというような形でしたので、これについてはいろんな御意見はあるかもしれませんが、市としてはそういう計画を立てて、こちらの方々もここに住みたいと、継続して住みたいというお話でしたので、この山を削って高台をつくったと。その土地をこちらの高田の山際に盛ったというところでございますので、先ほど課長からマッチングの話がありましたが、区画整理事業ですので、最後は減歩して御本人に返すのが基本ですので、そこは一旦お返しすると。あとは、利用方法、家を建てるのか貸すのか。ただ、今ホテルの建設の予定があったり、さまざまな話は来ているようですので、そういう意味では街のほうが見えてくるのかなと。今現在も大分中心市街地には飲食店もできましたし、復興祈念公園から流れてくるルートも大分できていますので、そういう意味ではそこを逃がさないように、できるだけ交流人口も確保していきたいというような思いはあります。

○千葉福祉部次長兼保健福祉課長 このまち全体を、委員長がおっしゃったように、防災、減災のフィールドとして、まち1つをいろいろPRしていきたいというふうに思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

○齋藤福祉部長 一番困っているのは専門職がなかなかなくて、何をやろうとしても、

やっぱり高齢者なので、小規模多機能をつくろうと思っても、人が集まらないからつくれないという状況になっていることと、あとちょっと次長から御相談があった、今一番私の中でホットな話題がやっぱり復興特区の延長なのです。喫緊に動いていくお話なので、御支援をいただけたらと思っているところです。

訪問リハビリテーションの関係で、看護師が今訪問看護ステーションに移行したくても、看護師を募集しても来ないのです。私どもも今病後児保育をやりたいのですが、市で看護師を募集していても一向に集まらなくて、何をやろうとしても人材不足です。

○大槻復興局長 中核病院というあり方なのか、地域包括ケアはとっているの、包括ケアとこちらとの付き合いが非常に大事になってくるのです、こちらの施設との付き合いが。去年までの話で言うと、地域包括ケアをとるということもあったので、リハの職員を大量にふやしたと。なので、リハの職員というものをこちらに活用してほしい。それで、健康づくりをやって、それが先ほど齋藤先生からも話が出たのだが、いわゆる災害公営住宅など、そういうところに引きこもってしまって、1人になってしまって孤独死になるなどという人たちを、昔石木先生がやっていたニギニギ体操なんてあったでしょう。そういう体操などを活用して集会所にみんな出して、健康づくりみたいなのをやってもらって、そしてそういうことによって健康な年寄りが増えると国保税も安くなるし、市町村のためにもなるので、そういった形で上手に病院とつき合ってほしいなと思っているのですが。

○齋藤徳美委員長 こんな手があるので、少しはなどという遊びみたいな、そういうところで何か少し動かしていくことをしないと、正攻法でこれが欲しい、ああだと言っても、何ともなりませんということがむしろ多いのだと思います。そういうあたりで言えば、いろいろうまく運用していただくというしかないところもあるのかなという気はします。

○大槻復興局長 場合によっては、うちの復興局にも生活再建がありますし、そういった部分でも支援をさせていただきますので、ぜひ相談にいらっしゃっていただければ。

○齋藤福祉部長 ありがとうございます。

○佐々木復興推進課総括課長 では、よろしいでしょうか。

それでは、陸前高田市及び保健福祉総合センターの皆様、本日はお忙しい中御対応いただきましてありがとうございました。